

平成二十九年十一月一日発行 第二十七卷第十一号 通巻第三二七号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成29年11月号

岡井省二創刊



# 地 靈

高橋将夫

知恵の輪を力で外す文化の日  
蟋蟀にキーを合はせよ蝨斯  
藪虱つけて彼の世の父きたる  
松茸はまつこと隠れ上手なり

秋 灯の灯心のごと女ゐて  
恋心ありて鬼灯ともるなり  
曼珠沙華徹頭徹尾曼珠沙華  
秋扇けじめの音をたてて閉づ  
落ち蟬に蟻の群がる終戦忌  
流れ星地霊に触るる前に消ゆ  
空間を二分して切る新豆腐



# 槐安集

水野恒彦

終戦の記憶の底を紙魚走る  
大和三山越えゆく蛇は耽美なり  
翹荒れておほむらさきの後朝は  
白日に山河輝やく半夏生  
落陽の海くらくらと晩夏光

加藤みき

海の荒れ色変へぬ松咆哮す  
ねこじやらしの一つ靡かづ風に立つ  
客人の流し目よけれ夏の月  
葛根湯葛の花いま盛りなり  
神在月天使は翼休めをる

中島陽華

約束の錫杖加持よ青嵐  
神の松立つやコンチキチンの夏  
ゴジラ抱く子と浜にあり星涼し  
瀧落ちて矢は天空へ大祓  
シヤンソンを歌ふ大黒麦の秋

竹内悦子

猿滑り印鑑に黄楊象牙かな  
蓋つきの硯重たし小鳥来る  
蜻蛉の交みすぎゆく壺湯かな  
夕立や風の匂ひの水溜り  
八朔の米寿の姉の使りかな



雨村敏子

あかつきや塔あづま越ゆる雁の列  
流沙の音蓮の風となりにけり  
空蟬に風の生まるる松の幹  
はるけくも近くにありて盆の月  
水のなき橋かかりたる月の山

本多俊子

梨たべてふるさとの夜半みづみづし  
うす闇に高さのありぬをとこへし  
鳥渡るどこまでも地球不安なり  
西瓜食ぶ未来のことを語りつつ  
常世より来て笑ひたる稚鯽わらさかな

近藤喜子

たましひの通り道みゆ芒原  
落鮎の一生涯を掬ひけり  
わが星のかく燃えてあれ鶏頭花  
かげろふの舞ふ水あかり夕あかり  
生まれくる命のはじめ天の川

瀬川公馨

巷にて何まつ白蓮紅蓮  
花槐ひらりと森を出でにけり  
白露を分けて菩薩の来たりけり  
きいたぞきいたぞカンナの枯るる音  
葛かづら生まれながらの追っ手なり

久保東海司

蕉翁の句碑はその奥道をしへ  
香水の控へ目がよし観劇会  
盗泉の水は好まず螢舞ふ  
砂埃拂つて商ふ盆の市  
頼み合ふ日々の夫婦や冷奴

柳川 晋

魔女の鍋には欠かせない蟬の殻  
明月が門を推したり敲いたり  
百歳の吾も交じりて踊の輪  
人間が一番キケン敬老日  
欲望を解き放ちたる蟬の殻

熊川暁子

百歳が汗を力に杖にして  
国病むや蜥蜴のしつぽすぐ生える  
誰か見てゐる八月の空を見る  
地球より大き西瓜の浮いてをり  
夜の蟬末期の水は星しづく

寺田すず江

甌穴に秋のひかりの戯れて  
一おとと昨日を遠くに思ふ孟蘭盆会  
蝸や一直線に日ぐれ来る  
生きること精いつばいや法師蟬  
ふりむけば秋の風なり迷ひ星

岩下芳子

俳号の所以は知らず省二の忌  
手招きをしてゐる夜の百日紅  
大海を跨いで白し天の川  
石白は左に廻す新豆腐  
デッサンは難行苦行夏果つる

近藤紀子

さはやかに西部への旅終へしとぞ  
青田風浴びし五体のかるやかに  
秋暑し墓石に触るる掌  
烏瓜咲く森の端の暗さかな  
真夜に鳴く蟬の身の上案じたり

岩月優美子

アツティカの壺眼前に秋立てり  
迷界を行きつ戻りつ秋の蛇  
人も木も息深くなる葉月尽  
咲き初めし芙蓉少女のはにかみに  
永久に音無く流る天の川

竹中一花

鳥羽僧正忌水音山音竹の音  
日焼の子日焼の父の胸に寝る  
木も土もあかあか暮れし覺猷忌  
極楽六道辻の余り風呼ぶ酔芙蓉  
異界への入口みそはぎ括らるる

前田美恵子

利酒の猪口は小さき白磁かな  
悪霊を食らはんとす鹿の群  
一枚の絵に出合ひたる夜の秋  
水澄むや細波に山暮れ残る  
千年の史を語るや萩の露

中田禎子

カップルの程よき間合ひ秋の川  
秋蝶や波の立ちたる鳩の湖  
韋駄天の刻かけめぐる盆の月  
色鳥や真神原の五輪塔  
ひぐらしや未知なる道の数多ある



# 槐市集

有松洋子

この道をぼちぼちゆかう草の花  
満天に白く澄む星聖母祭  
西へゆく日を追うて啼く法師蟬  
ふりかへりふりかへりゆく流灯も  
この辺りむかし色街鳳仙花

犬塚芳子

雨一夜明けてあかるき揚羽蝶  
一日がどつしりしたり孔雀草  
蚊帳吊草雑草として引きにけり  
盆の月さ迷う雲にかくされし  
蝸や赤い夕日を追ひ立てる

犬塚李里

きのふとは違ふ風受く酔芙蓉  
穏やかに暮れて荔枝を炒めをり  
思ひ草丈きそふことなかりけり  
疎まれてこれまで生きて蛇穴に  
生き残る証しとばかり虫の闇

井上静子

新涼やハーブの小粒もらひける  
秋茄子を描きて旨き色となり  
朝顔の紺に合ひたる帯選ぶ  
説法の笑ひをさそふ彼岸寺  
井戸端の会話はづみし団扇かな



今井充子

列島をあちこち襲ふ秋出水  
秋初め鉦鼓の音色透き徹る  
高齡の名医を懐く盆の月  
押入れの整理を終へて良夜かな  
悼日野原重明先生  
石けんの仄かに香る更衣

安野眞澄

現し世のしがらみ知らず水中花  
滝しぶく五感も声もすい込まる  
相輪にふるる酷暑や鯉の口  
さはやかに馬のたて髪風かせて  
夏祭り足にそぐはぬホテル下駄

三木 亨

燃え尽きてカンナ黒ずむ野の真昼  
蝸が此処を異界と啼く夕べ  
盆踊向きを返せば黄泉の顔  
踊の輪螺旋を描き闇に入る  
始まりも終はる恋にも遠花火

柳橋繁子

真青なる八月の空黙禱す  
来迎の阿弥陀三尊昼寝覚  
爽籟や行基の寺のいろは歌  
しづの家の大盤振舞盆三日  
この岩根曲つた辺り大花野

山田佳子

登校の列の途絶えて蟬時雨  
空は無<sub>限</sub>縦横に飛ぶ夏燕  
月見草あまりに遠き母の影  
ハイヒール棄て置かれある小暑かな  
アサイーの瓶の底ふる初秋かな

吉田順子

真葛原ぐらりと風の吹き変る  
神木ほぐに鳴いてをるなり法師蟬  
天平の風呼ぶ鹿の声澄めり  
夕日影どこかに秋の気を秘めて  
流星に揺るる夜空の残りたる

# 槐集

## 高橋将夫選

たましひはひとりにとつ白木椽  
ひとりには多すぎる風真葛原  
大阪 有松 洋子

椽に窓黄泉の秋天見たまへと

柚子でこぼこ各各おのおのにある言ひ分

掌に享くる粒子こまやか秋の水

旅立ちの四肢のあやふき茄子の牛

檸檬切る自意識といふ固きもの

天平の拈華微笑に黴の花

短夜のつまぐる珠数の軽さかな

満月へ興入れさせよ核兵器

斑猫の誘ふ道を迷ひけり

深窓の佳人は淡き花茗荷

蝸や夜の扉のあいてをり

地藏会や虐待さるる子を救へ

痴話喧嘩まだまだできる生身魂

江島 照美

平野 多聞

貧富なく新涼の朝は等しく  
過疎の村考妣が埋むる踊の輪  
守口 三木 享

秋高し定まる生を豚一途

甕に立つ香りも白き濁り酒

思ひ切り小石を蹴れば星流る

青年の瞳に白帆夏兆す

飛行機の近づいてゆく大花火  
大阪 藤田美耶子

身は病むとも魂は健やかほととぎす

迷ひなく弥陀の手のひら蟻の道

くちなしの香に誘はるる白日夢

天空の道ひらきたる秋燕

銀漢の端垂れぬたり父の墓  
岡崎 吉田 順子

蝸螂の六法踏みて失せにけり

秋薔薇彩を尽くせど淋しけれ

切り崖に日の沈みたる花野かな

柩に窓黄泉の秋天見たまへと 有松 洋子  
柩にある小窓は、故人が黄泉でそこから秋天を見られるようにとの心遣いだという。故人への思いやりが伝わってくる。

〈たましひはひとりひとつ白木樅〉の句、当たり前のようだが、魂などないという唯物論者もいるし、万物に靈魂があるというアニミズムや、多重人格の世界もある。しかし、作者にとつて、魂は一人に一つ。

〈ひとりには多すぎる風真葛原〉の句、広い真葛原を渡る風は確かに一人では受け止められそうにない。

〈柚子でこぼこ各各にある言ひ分〉の句、「各各」にある言ひ分」と「こぼここの柚子」の対比は、さすがこの作者ならではの。

〈掌に享くる粒子こまやか秋の水〉の句、秋の水に粒子を感じるころもまた、この作者ならではの感性。素粒子はもとより水の分子も粒子の集まり。

旅立ちの四肢のあやふき茄子の牛 平野 多聞  
盃蘭盆会の茄子の牛がコミカルに描かれている。

〈檸檬切る自意識といふ固きもの〉の句、檸檬の固さと酸っぱさ、さらに檸檬の字体はまさに自意識そのもの。

〈天平の拈華微笑に黴の花〉の句、「拈華微笑」は禅宗で以心

伝心教外別伝を言うが、古い仏に黴でも生えたのだろうか。しかし、「天平」「拈華微笑」「黴の花」と詠まれるとありがたい阿弥陀さまが見えて来る。「仏の多聞」の面目躍如。

〈短夜のつまぐる数珠の軽さかな〉は、肩に力が入っていないかろやかな一句。

〈満月へ興入れさせよ核兵器〉の句は面白い発想だが、意見としては賛成できない。月は昔のままであってほしいものだ。

地蔵会や虐待さるる子を救へ 江島 照美  
時勢がナマで詠まれているが、季語の地蔵会で救われている。〈深窓の佳人は淡き花苜蓿〉は、「深窓の佳人」に「花苜蓿」を持つてきたのが手柄。

〈痴話喧嘩まだまだできる生身魂〉の句、まだまだ達者な生身魂で、めでたい限り。

過疎の村考妣が埋むる踊の輪 三木 亨  
農村の過疎化。小さくなった盆踊りの輪もご先祖さまが加わればさぞや賑やかになることだろう。

〈貧富なく新涼の朝は等しく〉の句、新涼の朝に貧富の差はないというところが目新しい。

〈秋高し定まる生を豚一途〉の句、豚に生まれたのも運命と、一途に生きるところがいい。

〈思ひ切り小石を蹴れば星流る〉の句、「石けり」から「流れ星」への飛躍がいい。因果関係を越えた。

〈以下略〉